

バウムテストの基礎的研究〔I〕

——いわゆる「2枚実施法」の検討——

一谷 彊・津田 浩一・山下 真理子・村澤 孝子

Basic Research on Baumtest (Koch's Tree-Drawing Test)〔I〕

——An Investigation of Twice-Application Method——

Tsuyoshi ICHITANI, Koichi TSUDA, Mariko YAMASHITA,
and Takako MURASAWA

Received April 30, 1985

抄録（抜萃） バウムテストの臨床場面での、いわゆる「2枚実施法」について、一般群と臨床群とに関して比較、同時に事例による吟味検討を行なった。

この結果、1枚だけのバウムテストでの人格診断には限界と不安定さがうかがわれ、2枚描いてもらうことの必要性が示唆された。

このことについて、事例的研究も補足することにより、「2枚実施法」の意義を考察した。

検索語 バウムテスト、2枚（2回）実施法、臨床群、ケース・スタディ、妥当性

Abstract In the present study, the validity of the so-called "twice-application method" of Koch's Baumtest (Tree-Drawing Test) was investigated. As a result, it was verified that this twice-application method brought a very significant personality diagnosis with special reference to the clinical groups, which had antisocial and asocial behavior disorders. In the case-study research, this fact was verified.

Key Words Baumtest (Koch's Tree-Drawing Test), Twice-Application Method, Clinical Groups, Case-Study, Validity.

I はじめに

「樹木 (Baum)」という媒介によって描き出された描画から人格診断を試みようとするバウムテスト (Baumtest) は、投影法的一种に分類され、広く臨床心理学の分野において活用されてきている。しかし、バウムテストも他の投影法と同様にいろいろな問題を内包している。バウムテストの創始者である Koch (1952) は、「樹木画は、…深層とごく表層とのみごとな混合である。」しかし、「表面と投影の所産との差異に注意しなくてはならない。」とか、「心の全て

が表現されていると判断してはならない。」「全人格が賦活化されるが、それには非常にむらがあることは確かである。」と述べている。更に、「何かの事情で最初にかいた絵が被験者の像と一致していないとか、被験者をあまり鑑別できそうにないと感じるときは、テストをくり返して行なってよい。……被験者が2回目にかいたものが、被験者の姿を表わしていることが多く、ほとんどの場面がそうであるといってよいくらいである。」と述べ、「再テストをくり返すことで、より深層に到達することができ、かつ同一被験者のいろいろな層を次々ととらえることができる。」という層分析法 (method of layer analysis) の有効性を論じている。

このように、Koch が施行方法についても適切な指摘をしているように、バウムテストの特徴である施行の簡便さと運動を媒介とする表現の不安定さをどのように生かしていくかが問題である。すでに、信頼性の研究については青木 (1977, 1978, 1979)、仙田 (1980)、木村 (1981) の報告があり、十分に信頼できる心理検査であることが確認されてきている。また、教示については、必ずしも統一されているとは思えないが、集約的には、教示の差による結果の差は投影法として許容範囲内のものと結論してよいといえる (津田, 1976; 青木, 1980; 高見・中田, 1978; 中田, 1980)。しかし、臨床場面では、たとえ統計的に有効であるとしても、一枚 (一人の被験者) のバウムを診断していくには、わずかな指標も大切であり、統一した教示であることが望ましいのは当然である (一谷他, 1975)。

そして、我々は、以前から臨床場面における心理診断や心理治療過程の検討については、一度の検査に対して十分に被験者の意志を尊重しながら2枚をワンセットとした「2枚施行法」をとってきている (津田, 1976; 津田他, 1981; 山下他, 1983)。しかし、施行方法として、1枚だけでいいものか、何枚も描いてもらうのがいいのかについて厳密な検討はなされていない。我々は、臨床的経験からすると何枚描いてもらってもそれぞれに意味深い表現がみられ、考えさせられることが多い。では、無制限に描いてもらうことでよいかということと必ずしも良いとも思えない。当然な事ながら、いろいろな意味で被験者に負担を与えすぎるからである。いずれにしても、臨床場面ではどのような施行方法が妥当なのかについては、バウムテストの重要な課題であると考えている。(また、どのような項目が安定して恒常的に表現され易く、どの項目が不安定であるかについても関心をもっている。)

II 目 的

現在、我々は、一度の検査場面における施行方法の原則として「2枚」をワンセットにしている。すなわち、検査の最初に Hammer, E. F. (1960) のいう面接場面を切り拓いていく “ice breaker” の役割として、1枚目を「樹の絵をかくて下さい」という教示のもとに施行し、次には、受容的・支持的雰囲気の中で他の心理検査やインタビューを行いながら、被験者―検査者関係の深化を計りつつ面接の最後に「もう一枚別の樹をかくて下さい」とお願いしてきている。

このようにして得られた一枚目と二枚目のバウムの関係を検討して、臨床場面における施行方法を考察する。

III 対 象

対象は、一般群（健常児群）として、幼稚園児34名、小学校5年生36名、中学校2年生31名で、臨床群として、非行児48名、登校拒否児42名、神経症者52名で、合計243名である。なお、非行児と登校拒否児は、いずれも中学生であり、神経症者については、精神科医によりそのように診断された成人である。以上を男女別にして表1に示す。

IV 施行方法と整理方法

一般群は、集団法で施行し、臨床群は、個別法で施行した。なお、一般群は、1枚目と2枚目の間に Rosenzweig P-F Study（児童用）を施行した。また臨床群については、描画間の条件は統制されてはいないが、いずれの対象児（者）の場合も各種の投影法・質問紙やインタビューが行われている。

整理方法は、2枚のバウムに表現されたものを「バウムスト整理表」（国吉他，1980）に基づいて各個人ごとに全体的所見（「Ⅷ. 空間利用の領域」以下の項目）、風景および附属物、地平と木との関係、根、枝、幹、冠、果・花・葉の全項目について津田と山下の両者で別々にチェックし、不一致の場合には合議により決定した。次に、各対象ごとに、男女別、男女計に分けて1枚目と2枚目の平均チェック項目数を求め、更に、下記の式により1枚目と2枚目との一致率と合致率とを操作的に規定し集計した。

すなわち、一致率とは、1枚目でのチェック項目数を分母とし、1枚目と2枚目との両方ともで同時に重複してチェックされた項目数を分子として比を求め、それに100を乗じたものである。つまり、表2の場合で例示すると、1枚目でチェックされた項目は、No. 1, 5, (n-4), (n-3) の4項目でこれが分母となる。また、1枚目でチェックされた項目のうち、2枚目でも同時に重複してチェックされた項目は、No. 5, (n-3) の2項目でこれが分子となる。したがってこの場合の一致率は、

$$\text{一致率} = \frac{1 \text{ 枚目チェックされ、2 枚目でも同時に重複してチェックされた項目数 (一致数)}}{1 \text{ 枚目でのチェック項目数}} \times 100 = \frac{2}{4} \times 100 = 50.0 (\%)$$

表1 対象

性別		男	女	計
一般群	幼稚園児	19 (名)	15 (名)	34 (名)
	小学5年生	21	15	36
	中学2年生	15	16	31
臨床群	非行児	24	24	48
	登校拒否児	27	15	42
	神経症者	37	15	52
合 計		143	100	243

表2 一致率と合致率の算出のための技巧例（ある被験者Aの場合とする）

チェック項目番号 (No.)	チェック項目内容	1枚目 (1回目)	2枚目 (2回目)
1		✓	
2			
3			✓
4			
5		✓	✓
~~~~~			
n-4	.....	✓	
n-3	.....	✓	✓
n-2	.....		
n-1	.....		✓
n	.....		✓

となる。また合致率とは、1枚目と2枚目とに同時に重複してチェックされた項目数(一致数)を、1枚目と2枚目との各々でチェックされた項目総数で除して100を乗じた指数(%)である。表2で例示すると、分子となる一致数は上に示した一致率の場合の分子と同じだが、分母に相当するものは、1枚目では No. 1, 5, (n-4), (n-3) の4項目であり、2枚目では No. 3, 5, (n-3), (n-1), (n) の5項目であるが、これらのうち No. 5 と No. (n-3) とは2度数えているから  $(4+5)-2=9-2=7$  となる。したがってこの場合の合致率は、

$$\text{合致率} = \frac{1\text{枚目でチェックされ、2枚目でも同時に重複してチェックされた項目数(一致数)}}{1\text{枚目と2枚目との各々でチェックされた項目総数}} \\ \times 100 = \frac{2}{(4+5)-2} \times 100 = \frac{2}{7} \times 100 = 28.6(\%)$$

となるといった具合である。経験的には、一致率では分母の値が小、合致率では分母の値が大となり、分子は両者で同じだから、相対的には、一致率の数値の方が合致率の数値より大となる傾向があり、いずれを採り入れても、ほぼ同様のことがいえるように思う。したがってここでは、主として一致率を中心に言及していくことにしたい。

## V. 結果と考察

### 1. 対象とチェック項目数との関係

まず、「バウムテスト整理表」にチェックされた項目数が対象によってどの程度みられるかを検討する。なお、空間領域については、バウムの描かれているマス目1つを1チェックとして数えた。この結果を示したのが表3である。

これによると同一対象群ごとの男、女、計の1枚目と2枚目のチェック項目数の平均は、1枚目の方が2枚目より若干多いのはほとんどの対象群でみられるが、統計的有意差は認められなかった。また、平均値の最少は、幼稚園児女子の2枚目の25.3であり、最多は、中学2年生男子の2枚目の36.9となり、明らかに統計的有意差 ( $t=5.548$ ,  $df=28$ ,  $P<0.001$ ) がみられた。しかし、全対象群についてみるとほぼ30前後のチェック項目数になるといえよう。更に、男女計におけるチェック項目数の最多は、中学2年生の1枚目の33.9であり、最少は幼稚園児の27.6となり、統計的有意差 ( $t=4.034$ ,  $df=63$ ,  $P<0.001$ ) を示していた。その他、幼稚

表3 「2枚法」におけるチェック項目数と一致数及び合致率

対象群		一 般 群									臨 床 群									
		幼 稚 園 児			小 学 5 年 生			中 学 2 年 生			非 行 児			登 行 拒 否 児			神 経 症 者			
		男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計	
対 象 数	19	15	34	21	15	36	15	16	31	24	24	48	27	15	42	37	15	52		
チ ェ ッ ク 項 目 数	一 枚 目	M	29.1	26.8	28.1	33.0	31.7	32.4	36.1	31.8	33.9	30.6	30.3	30.5	30.4	30.2	30.3	29.3	26.9	28.6
		S.D.	4.58	3.12	4.16	5.77	4.25	5.23	8.56	4.35	7.07	6.40	6.66	6.53	4.73	5.69	5.10	5.40	3.36	4.96
	二 枚 目	M	29.4	25.3	27.6	31.4	32.2	31.8	36.9	29.8	33.2	30.1	28.8	29.5	31.0	29.8	30.6	28.3	27.3	28.0
		S.D.	5.84	3.15	5.26	4.86	3.87	4.49	7.16	4.34	6.87	6.21	4.31	5.38	6.74	5.11	6.24	5.04	5.08	5.07
一 致 数	M	23.6	19.4	21.8	22.3	24.5	23.2	25.8	23.5	24.6	21.3	20.1	20.7	20.1	19.7	20.0	18.9	17.7	18.6	
	S.D.	4.92	3.68	4.89	4.77	3.42	4.40	7.46	5.18	6.49	6.29	3.75	5.21	5.74	4.60	5.36	4.86	5.01	4.88	
合 致 率	M	80.7	74.4	78.0	69.3	76.7	72.4	70.0	76.1	73.1	70.1	68.8	69.5	64.9	65.7	65.2	65.8	65.7	65.8	
	S.D.	9.43	11.12	10.68	11.19	9.00	10.98	10.74	11.29	11.44	13.36	11.27	12.38	13.23	10.29	12.27	13.69	17.80	14.87	

園児と小学5年生間にも統計的有意差 ( $t=3.739$ ,  $df=68$ ,  $P<0.001$ ) がみられ、一般群における対象群間では、チェックされる項目数には統計的有意のみられることは確かである。ただし、臨床群間では、差は認められなかった。そこで、一般群における1枚目男女計のチェック項目数の変化を検討してみると統計的有意差がみられ ( $F=9.533$ ,  $df=2/95$ ,  $P<0.01$ )、発達的にチェック項目数が増加することがわかる。ただし、この傾向は、2枚目では認められなかった。

## 2. 対象群と一致率について

各対象群ごとに男女別、男女計について一致率の平均と標準偏差を示したのが表4である。(参考までに合致率を表5として提示しておく。) この表をみると、一致率は、対象群によって

表4 「2枚法」における一致率

群	一 般 群									臨 床 群								
	幼稚園児			小学5年生			中学2年生			非行児			登行拒否児			神経症者		
	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計
N	19	15	34	21	15	36	15	16	31	24	24	48	27	15	42	37	15	52
M	81.1	72.7	77.4	68.1	77.8	72.1	71.5	75.1	73.4	69.9	68.4	69.1	65.9	65.5	65.8	65.5	67.0	65.9
S.D.	9.84	12.57	11.89	11.72	10.04	12.03	10.84	12.99	12.12	13.97	14.67	14.34	15.00	10.66	13.61	15.94	18.8	16.68

表5 「2枚法における合致率」

群	一 般 群									臨 床 群								
	幼稚園児			小学5年生			中学2年生			非行児			登行拒否児			神経症者		
	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計
N	19	15	34	21	15	36	15	16	31	24	24	48	27	15	42	37	15	52
M	80.7	74.4	78.0	69.3	76.7	72.4	70.0	76.1	73.1	70.1	68.8	69.5	64.9	65.7	65.2	65.8	65.7	65.8
S.D.	9.43	11.12	10.68	11.19	9.00	10.98	10.74	11.29	11.44	13.36	11.27	12.38	13.23	10.29	12.27	13.69	17.80	14.87

かなり差がみられるが、概ね60～80%となりかなり高い数値を示しているといえる。次に、各対象群の男女計の一致率を高い順に並べると①幼稚園児、②中学2年生、③小学5年生、④非行児、⑤神経症者、⑥登校拒否児のように、上位は一般群によってしめられ、下位は臨床群がしめるという結果となっている。この両群の関係を  $t$ -検定によって統計的に検討してみると、「小学5年生と非行児」、「中学2年生と非行児」のそれぞれのあいだには有意差が認められなかったが、その他は全て5%以下の危険率で有意差がみられた。この意味について、一致率の高い事例(事例1)と低い事例(事例2)を示しながら考えてみたい(図1～4参照)。

まず、一般群と臨床群の一致率の差は、10%前後あり、両群の差に有意差があるのは、一般群の方が、臨床群に比べて2枚のバウムを描いても変化が少なく、一致点が多いことになり、パーソナリティを表現するのに1枚だけでもかなり高い確率で安定した表現がなされていることを示しているといえよう。これに対して臨床群は、一般群と異なって何らかの問題があって検査を受けているという意味からすれば、当然描画への動機の相違が前提にあり、更に、1枚目と2枚目についても構えも異なったものがあると推察される。結果として、1枚目と2枚目の表現に差が大きく、2枚目では1枚目でみられなかった表現が一般群よりも多くみられ、1

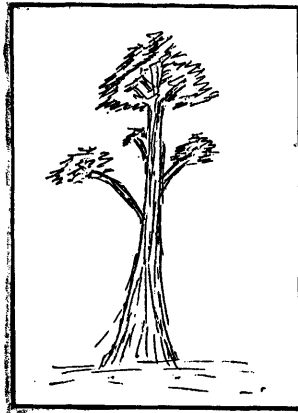


図1 事例1の「1枚目」

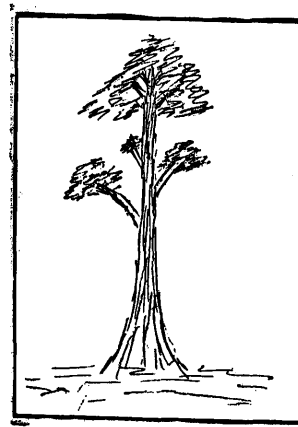


図2 事例1の「2枚目」

事例1：「2枚実施法」における変化の乏しい例（38歳，界子，神経症者）

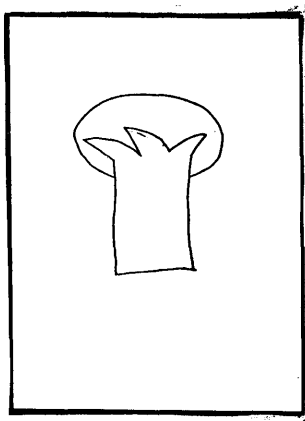


図3 事例2の「1枚目」

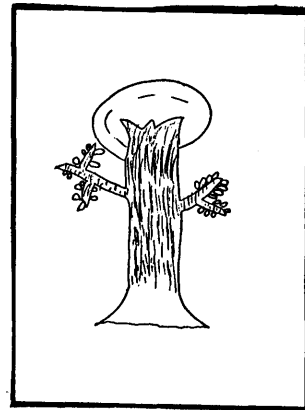


図4 「事例2の2枚目」

事例2：「2枚実施法」における変化の著しい例（小学5年，健常児）

枚目だけの表現による情報には限界があり，不安定であるといえよう。このことは，合致率からも同様のことがいえる。

次に，各対象群の標準偏差をみると臨床群の方が一般群より高い数値を示していて，臨床群の示す個人差の大きさを思わせるが，統計的に有意差は認められなかった。

また，一致率を性差（男女別）についてみると，幼稚園児（ $t=2.272$ ,  $df=32$ ,  $0.02 < P < 0.05$ ）と小学5年生（ $t=2.523$ ,  $df=34$ ,  $0.01 < P < 0.02$ ）にのみ有意差が認められ，他の対照群では認められなかった。特に，中学2年生と臨床群で差が認められないのは，1枚目と2枚目の表現の仕方に性別は要因として関係がないことを示しているといえよう。

ここで，同年齢群である中学2年生，非行児，登校拒否児の男女計について検討してみたい。「中学2年生と非行児」，「非行児と登校拒否児」間に統計的有意差は認められず，わずかに

「中学2年と登校拒否児」間に有意差 ( $t=2.437$ ,  $df=71$ ,  $0.01<P<0.02$ ) が認められた。すなわち、一般群に対して、臨床群のうち反社会的行動を示す非行群よりも非社会的行動を示す登校拒否児群の方が自己表現に対する防衛的態度が強いことの反映と思われるが、1枚目と2枚目の描画に差が大きく、1枚目だけでの心理診断について慎重さを要することへの注意を示唆しており、2枚目のもつ意義を示唆しているとも考えられる結果となっている。

### 3. 対象群と項目群別一致率について

対象群ごとに男女別を考慮しての項目群別の一一致率を示し、また同時に男女を合計して項目群別に一致率を示したのが表6である。全項目を総計した一致率については上述してきたが、ここでは、項目群を「全体的所見」(「Ⅷ, 空間利用の領域」以下の項目)、「空間利用の領域」(紙面上とはみ出し)、「風景及び附属物」,「地平」,「幹の基部」,「根」,「根の領域」(紙面上とはみ出し)、「幹」,「枝」,「冠」,「果・花・葉」に分類して、一致率で表わした。ここでは男女込みの合計を中心に一般群と臨床群について言及してみる。

表6 「2枚法」における項目群別の一一致率

対 象 項 目		一 般 群									臨 床 群									平 均 ( 全体) N=243
		幼 稚 園 児			小 学 5 年 生			中 学 2 年 生			非 行 児			登 校 拒 否 児			神 経 症 者			
		男 N=19	女 N=15	計 N=34	男 N=21	女 N=15	計 N=36	男 N=15	女 N=16	計 N=31	男 N=24	女 N=24	計 N=48	男 N=27	女 N=15	計 N=42	男 N=37	女 N=15	計 N=52	
全 体 的 所 見		84.2	80.0	82.4	70.2	80.0	74.3	75.0	84.4	79.8	81.3	85.4	83.3	75.9	81.7	78.0	81.1	75.0	79.3	79.6
領 域	紙 面	79.6	62.1	72.6	66.7	89.6	76.3	81.3	71.4	76.7	75.0	89.2	81.6	84.0	78.8	82.0	70.2	76.3	71.8	76.9
	はみ出し	64.3	42.9	57.1	47.5	68.2	54.8	67.3	56.5	64.1	63.6	51.4	58.0	72.7	22.2	61.9	29.4	66.7	32.4	53.4
風 景 ・ 付 属 物		100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	81.3	100.0	90.8	76.0	83.3	79.6	77.8	80.0	78.6	97.3	86.7	94.2	89.8
地 平		89.5	90.0	89.7	76.7	93.6	83.8	87.5	75.8	81.5	72.6	73.2	72.9	72.7	60.0	67.8	73.2	70.3	72.3	77.0
幹 の 基 部		88.2	61.5	76.7	53.9	81.3	89.0	72.3	75.0	73.9	77.8	62.5	70.6	67.9	62.5	65.9	67.6	46.7	61.5	68.9
根		92.3	79.0	86.7	78.1	93.3	83.0	62.5	75.0	68.2	46.2	61.0	53.8	67.5	57.1	62.7	51.6	57.9	53.0	65.9
根の領域	紙 面	50.0	66.7	60.0	66.7	0.0	66.7	44.4	55.6	50.0	8.3	24.0	18.9	54.5	68.8	63.0	9.5	0.0	7.4	40.9
	はみ出し	0.0	0.0	0.0	0.0	—	0.0	66.7	66.7	66.7	—	27.3	27.3	0.0	0.0	0.0	0.0	—	0.0	13.9
	幹	80.0	77.1	78.8	65.3	73.0	68.4	68.8	77.0	72.9	76.4	67.4	71.9	61.4	61.9	61.5	64.8	61.0	63.7	68.9
	枝	78.3	53.3	68.7	69.6	79.3	73.5	74.6	74.3	74.4	60.7	59.2	60.0	53.2	62.8	56.2	61.0	66.7	62.5	64.9
冠		50.0	85.7	72.7	50.0	66.7	54.6	20.0	40.0	30.0	68.4	21.1	44.7	50.0	50.0	50.0	27.8	66.7	33.3	46.7
果 ・ 花 ・ 葉		73.7	69.2	71.9	61.1	56.0	59.0	48.3	50.0	49.1	62.1	59.3	60.7	65.7	52.9	61.5	60.5	66.7	62.5	61.1

ここで、一つの目安として一致率が80%以上の高い項目群（高一一致率項目群）と60%以下の低い項目群（低一致率項目群）に分けて両群について検討してみた。すると、一般群では、高一一致率項目群：低一致率項目群＝9：9となり、全項目群数の46%がどちらかに該当していることになる。しかし、臨床群では、高一一致率項目群：低一致率項目群＝4：13となり、全項目群数の44%を占め、しかも低一致率を示す項目群が多いことがわかる。このことは、全項目を総計した一致率による検討結果を上述してきたが、更に、一歩進めて項目群ごとの一致率をみると、かなりバラツキがあり、決して平均的一致率でみることがバウムの一致率を見ることにはならないことをうかがわせている。しかも、臨床群において低一致率項目群が多いことは、検査実施上の大きい問題を暗示しているとともに、臨床的にも考慮すべき重要な点を暗示しているといえよう。更に、この点について、対象群を込みにして、項目群別に一致率の分布をみると表7の通りである。ここでの配列は、一致率の高い順にした。この結果を見ると、項

表7 項目群別の一致率の分布

一致率 項目群	～90	～80	～70	～60	～50	～40	～30	～20	～10	～0
風景・付属物	4	・	2	・	・	・	・	・	・	・
地平	・	3	2	1	・	・	・	・	・	・
全体的所見	・	2	4	・	・	・	・	・	・	・
空間領域 (紙面)	・	2	4	・	・	・	・	・	・	・
根	・	2	・	2	2	・	・	・	・	・
幹の基部	・	・	3	3	・	・	・	・	・	・
幹	・	・	3	3	・	・	・	・	・	・
枝	・	・	2	3	1	・	・	・	・	・
果・花・葉	・	・	1	3	1	1	・	・	・	・
冠	・	・	1	・	2	1	2	・	・	・
空間領域 (はみ出し)	・	・	・	2	3	・	1	・	・	・
根の領域 (紙面)	・	・	・	3	1	・	・	・	1	1
根の領域 (はみ出し)	・	・	・	1	・	・	・	1	・	4

目群によって高い一致率を示すものには「風景・付属物」,「地平」,「全体的所見」,「空間領域(紙面)」があり, 中位の分布を示すものには「幹の基部」,「幹」,「枝」があり, 低い一致率を示すものには「根の領域(紙面)」,「根の領域(はみ出し)」がみられるように, 項目群によって一致率に安定して高率を示すものから50%以下の低い率を示す項目群にまで広く分布していることがわかる。また, 平均値の高い項目群は,「風景・付属物」,「全体的所見」,「地平」,「空間領域(紙面)」という順になり, 低い項目群は, 根の領域(はみ出し),「根の領域(紙面)」,「冠」の順となり, 分布からみられる特徴とも一致する。なお, 大津山(1984)は, 大学生に一定期間(約2週間)をあけて3回(3枚)のバウムテストを実施し, 同じ分類評価方法によってその保持率を算出した。その結果, 保持率が高いのは,「風景・付属物(85.0%)」,「全体的所見(75.0%)」,「幹(72.4%)」,「幹の基部(72.0%)」であり, 低いのは,「空間領域(33.7%)」,「枝(57.0%)」,「冠(59.3%)」となり, 他の項目群は60%台の結果を示した。ここで, 両結果を同一にして扱うことは無理であるが, 我々が検討している項目群による一致率の違いについては, 同様の結論を示唆しているとみてよいのではないと思われる。

従って, 項目群における上記のような結果から, 項目群のうち一致率の高い項目群はよいとしても, 低い項目群が多く, しかも, 臨床群にその傾向が著しいところに問題がある。同一被験者が一度に2枚描いたバウムに一貫性や安定性が乏しいということは, 解釈をしていく上で重大な問題点といえる。このことを逆にいえば, 2枚描いてもらって得られた結果は, 1枚だけの場合に比べて相当量の新しい情報を提供してくれると同時に「別の木をもう1枚かいて下

さい」という教示によって、被験者の別の人格的側面を表出してもらえる結果となったといえるし、Koch のいう「…2 回目にかいたものが被験者の姿を表わしていることが多く…」ということからすれば、1 枚目で得られるものだけで解釈や判断をしていくことの危険性を示しているともいえる。ここに「2 枚実施法」の臨床場面での実施の方法論的根拠があるといってもよからう。

#### 4. 同一被験者による連続描画からの検討

それでは、Koch のいうように「再テストをくり返すことで、より深層に到達することができ、かつ同一被験者のいろいろな層を次々ととらえることができる」という点からすれば、「2 枚実施法」では不十分ではないかという疑問も出てこよう。我々は、この点に関して同一被験者にはほぼ毎日、「2 枚実施法」のもとで行った 5 日間の計 10 枚のバウムをもとにして検討を加えてみる。

まず、整理の方法は、全バウムを「バウム・テスト整理表」にもとづいてチェックし、1 回目の 1 枚目のチェック項目を基にして 1 回目の 2 枚目以下に新たに出現してくる項目を加えていき、10 枚にみられたチェック項目総数に対して 1 回目の 1 枚目のチェック数は何％に当るかというように 1～10 枚までを示したのが表 8 である。そして、それをグラフに示したのが図 5 である。

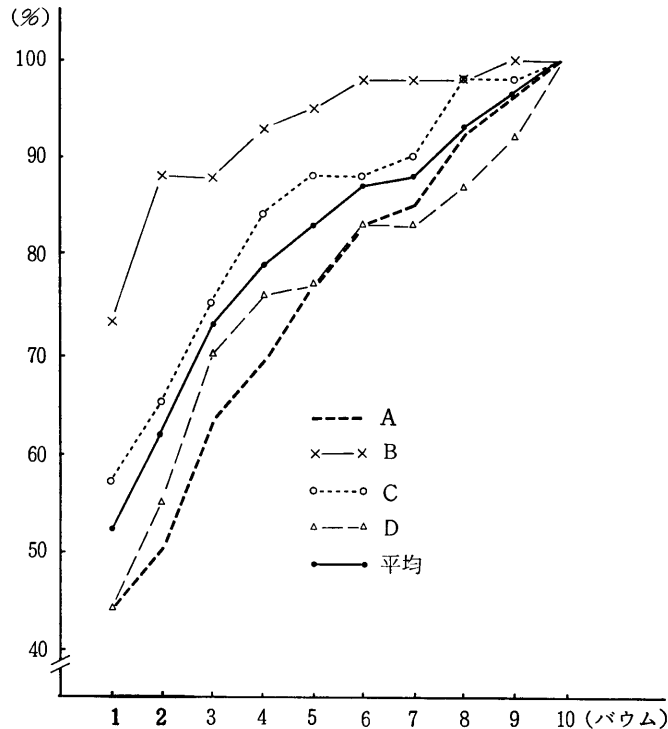
対象者としての被験者 A は、中学 1 年生の女子で夜尿症を主訴とし、被験者 B は、中学 1 年生の男子で非行児、被験者 C は、小学校 6 年生の女子で養護相談が主訴、被験者 D は、高校 2 年生の男子で神経質な少年であった。

表 8 と図 5 からわかるように、テストをくり返していくと確かに新たな項目が出現してくることが理解できる。4 名の被験者の示した出現項目の頻数の様相は、第 1 回目の 1 枚目の出現

表 8 連続描画における項目の出現様目

バウム 項目	1 回 目		2 回 目		3 回 目		4 回 目		5 回 目	
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
被験者	f	%	f	%	f	%	f	%	f	%
A	23	44	26	50	33	63	36	69	40	77
B	29	73	35	88	35	88	37	93	38	95
C	29	57	33	65	38	75	43	84	45	88
D	31	44	39	55	50	70	54	76	55	77
平 均	112	52	133	62	156	73	170	79	178	83
上	昇 率 (%)	A	6	13	6	8	6	2	7	4
昇			15	0	5	2	3	0	0	2
率			8	10	9	4	0	2	8	0
(%)			11	15	6	1	6	0	4	5
平 均			10	9.5	6.5	3.8	3.8	1	4.8	2.8
平均の順位			1	2	3	5	5	9	4	8

図5 連続描画における項目の出現様相



項目の％に応じて、それぞれに漸増するカーブを描いており、いずれも急増することはなく、変化のない時がわずかにみられるように、個々の人格の許容される範囲で少しずつ表出されていくもののように理解できる。

このようにみえてくると、「2枚実施法」によって示された情報量は、10枚のバウムの約6割にしかすぎないことになる。3枚目では約7割を示し、4枚目で8割近くなってくる。一回の検査で何枚の実施が適切かは、いろいろな観点からの意見があるが、1枚目から2枚目、2枚目から3枚目というように4人の被験者の平均上昇率（新たに描かれた項目数の数の割合）をみると、1枚目から2枚目が最も高く10%みられ、2番目は、2枚目から3枚目（2回目の1枚目）が9.5%、3番目が3枚目から4枚目の6.5%となっている。

このように詳細に検討してみると、バウムテストの連続描画で得られる結果から、バウムテスト1枚1枚のもつ検査評定項目の不安定な側面がよく理解できるように、また、1枚ごとに示される情報の不安定さもよく理解できるのである。従って、バウムテストを臨床場面で活用していくには、1枚だけという実施法（1枚実施法）では、あまりにも情報量が少なく、しかも、防衛機制が働きやすいので望ましい実施法とは思われない。実施に当たっては、更に、解釈する場合には、2枚目以後に、1枚目とは異なった意義ある示唆的な側面が表われてくる可能性の多いことを知った上で行なわれるべきものであろう。このように考えてくると結論的には、被験者の心理的負担を考え、情報量の必要量を考えれば、2枚描いてもらうのが精一杯ではないかと考える。

## 5. 事例による検討

ここでは、村沢による事例報告を通して実施方法のあり方や問題点を考えてみたい。

本事例（K. A.）は、55歳の女性で先天性ろうあ者である。現在、授産施設に入所中であるが、山奥の村に生まれ育ち、幼ないころから全く教育を受けておらず、文字は書けず、手話もできず、わずかなジェスチャーでコミュニケーションをもてるだけである。さしたる職歴もなく、若いころは兄と一緒に農作業や林業に従事していた。不満があると暴れることが多かった。27歳時に山仕事をしていた時、本人のたばこの火の不始末から山火事となり、村におられなくなり、適当な施設もなかったため精神病院に入院させられた。そこでは普段の態度はおとなしく、病院の雑用係として重宝されていたようである。病院のカルテには接枝性分裂病と診断されていた。しかし、入院生活は実に17年間に及んだ。限院後の施設での様子は、おとなしいが、指導員の指示を無視し、仲間から孤立し、指導員は、重度精神薄弱者と判断し、指導についてもほとんど諦めているとのことであった。そこで、今後の方針を考えるために心理判定を実施することとなった。しかし、施設に訪問してすぐに心理検査を実施しようとしても不可能なことが多く、検査前に2日間にわたって一緒に食事をしたり、遊んだり、散歩したりして過したが、他の入所者と一緒の場面ではあまり打ち解けることはなかった。以下、面接の経過を報告しながら、そこで描かれたバウムについて考えてみたい。

- 1) 面接室の前で立ちすくみ、入室をためらっている。検者が手招きで「どうぞ」というと、視線を避けるようにして入室し、着席する。検者の挨拶には、無表情のままだいる。時々、チラチラと検者の様子をうかがっているが、視線回避し、警戒的である。たまに視線が合うと作り笑いをして「アー、アー」と検者に対してうなづいてくれるが、落ちつかない様子である。日常的なことについて検者が色々なジェスチャーを示すと、意味がわかってか分からずか声を出して笑うようになる。そして自分でもたばこを吸うジェスチャーを非常に細かく演じてみせる。そして、20分くらいの間、二人でジェスチャーの交換をする。次第に彼女のジェスチャーのレパートリーは増え、ネクタイを締める様子、稲を刈る様子、田植えをする様子などを非常にリアルに表現し、検者にもよくわかった。
- 2) 少し打ち解けてきたころをみて「樹の絵を描いてほしい」と伝え、意味がわからない

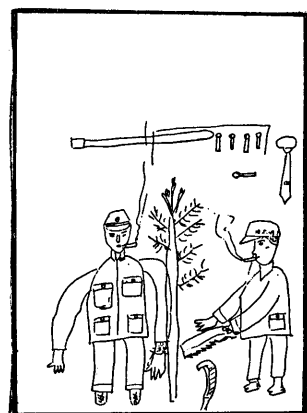
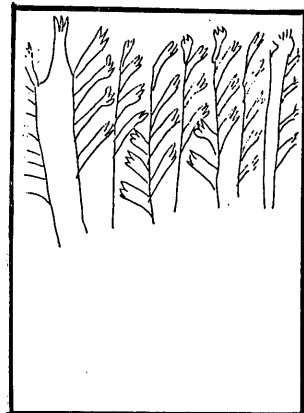
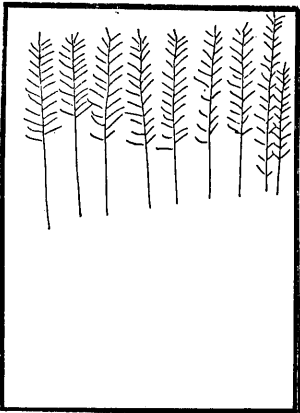


図6：K. A. さんのバウム（1枚目） 図7：K. A. さんのバウム（2枚目） 図8：K. A. さんのバウム（3枚目）

様子で「アーアー」と笑いながら何かジェスチャーを繰り返す。そこで「樹」についてジェスチャーで表現し、窓から見える山と林、樹々を示し、身ぶりをまじえて説明するとわかったのかうれしそうな表情が机に戻り1枚目の絵(図6)を描いてくれた。次に「1本だけかいてほしい」と伝えるがうまく伝わらなかったのか2枚目の絵(図7)となる。

- 3) 次に WAIS-P の知能検査と一緒に取り組む。「符号問題」「絵画完成」「積木問題」「絵画配列」は評価点はいずれも0点であったが、「組み合わせ」は評価点11点を獲得した。

このことを二人で一緒に喜びあった。

- 4) WAIS-P の知能検査の後に描いてもらったのが3枚目の絵(図8)である。

授産施設に入所してから指示しても描画することは一度もなかったとのことであるが、この3枚目では、描きながら検者に何らかのことを伝えようとして、次々とジェスチャーをまじえながら描いていった。従って、樹以外のものは、彼女がコミュニケーションの手段として描いたものと考えられる。

- 5) WAIS-P の結果は、IQ60 以下という評価となり、具体的な数値は換算不能であった。しかし、人物画(図9)は、立派に描け桐原(1948)の基準によって換算するとIQ94を示し、Harris, D. B. (1963)の基準によって換算するとIQ101を示した。そして、全面接過程を勘案すると知的能力は、境界級から普通知の範囲と推定されるものであった。

なお、心理判定の結果を報告した後、施設での認識が変わり、指導内容も大幅に変更されていったことを付言しておく。

本事例(K. A. さん)を通してバウムテストを実施するに当たって次の点が明らかになった。

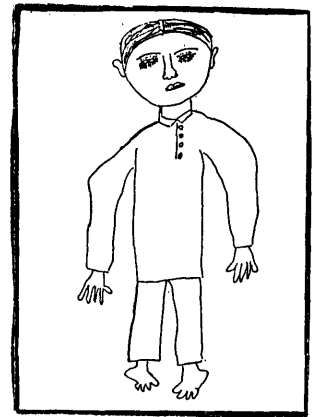


図9 : K. A. さんの人物画

- ①. バウムテストは、検者と被験者との人間関係の上に成り立っている。

3枚の樹木描画(バウム)の変化は、両者の関係の深化の上に成り立っていることは明らかで、被験者の防衛的、回避的、警戒的能度が強ければ、3枚目(図8)を描く力のある被験者が一線幹でステイオタイプな一線枝の樹しか描けないことになる。従って、両者関係が不十分のままであれば1枚目(図6)の資料しか得られず、解釈が相当変わったものとなる危惧がある。ここにバウムテストのもつ性質がうかがえると同時に、実施上の重要なポイントとなることが示唆されている。

- ②. 「2枚法」は検者と被験者関係が基盤である。

単に2枚を描くという場合にも変化があるが、本例の場合には関係が深化していく中で被験者がうちとけていき、意味深い3枚目(図8)を引き出せたと思われる。すなわち、両者関係の深化が被験者の描画への自我関与に強い影響を与えており、樹木の描出様式とのあいだに強い相関があると感じさせられた。従って、我々の実施方法は、一度の面接の最初の部分で1枚目を実施し、そして、他の検査やインタビューを実施して、最後に2枚目を実施する方法をとっていることに意味があることがこの事例を通して確認された。1枚目は、

新しい場面に直面した時の被験者の課題解決の仕方が示されよう。すなわち、自我防衛の態度が強ければ、図式的な描出様式へと逃げることもあろうし、達成動機が強い場合には、自我肥大的で力強い描画になることもあろう。そして、2枚目では、両者関係の深化と安定から、被験者の真の姿 (real self) が投影的に表現されると考えられるのである。

## VI. 結論と要約

バウムテストにおける臨床場面での実施方法としての「2枚実施法」を一般群と臨床群の比較と、事例による検討を行った。その結果、

1. 「2枚実施法」における両群での一致率は、概ね60～80%とかなり高い数値を示した。両群間では、一般群の方が臨床群よりも高かった。
2. 一致率を項目群別にみると、かなり差が大きく、特に、臨床群に低一致率項目 (60%以下) が多くみられた。また、1枚だけの描画の不安定さがうかがわれ、2枚描いてもらうことで1枚目を補足してくれる反面、1枚目だけでの解釈には限界が感じられた。
3. 同一被験者による連続描画 (10枚) における項目の出現様相をみると、再テストをくり返すことでより新しい描出がみられることは確認されたが、一枚一枚のもつ検査評定項目の不安定性という側面のあることもわかった。また、新たに描かれた項目数の割合 (平均上昇率) は、1枚目から2枚目が最も高かった。被験者の心理的負担を考え、検査としての情報の必要量を考えれば2枚が妥当と思われた。
4. 事例による検討から、検査は、検査者と被験者との人間関係の上に成立しており、両者の関係が深化すれば描画への自我関与ないし課題意識は深くなることが示された。

以上の結果から臨床場面では、1枚だけの実施には限界があり、被験者の負担と、必要な情報量とを考え併せると「2枚実施法」が妥当と思われた。

## 参考文献及び引用文献

- 青木健次 (1977) 絵画法の再検査信頼性——バウムテストを用いて——日本心理学会第41回大会発表論文集, 457  
 青木健次 (1978) 描画法の信頼性と妥当性 日本心理学会第42回大会発表論文集, 1226-1227  
 青木健次 (1979) 投影描画法の基礎的研究 (第1報)——再検査信頼性——心理学研究  
 青木健次 (1980) 態度統制実験による描画指標の検討 日本心理学会第44回大会発表論文集, 534  
 Hammer, E. F. (1960) The House-Tree-Person (H-T-P) drawings as a projective technique with children. In A. I. Rabin and M. R. Haworth (Eds.) Projective technique with children, New York: Grune & Stratton, Ch. 14, 258-272.  
 Harris, D. B. (1963) Children's Drawing as Measure of Intellectual Maturity. Harcourt, Brace & World INC.  
 一谷 彊, 津田浩一, 西尾 博, 岡村憲一 (1975) 投影法での反応と養育環境との関係についての比較研究——バウムテストと P-F スタディを中心に——京都教育大学紀要, Ser. A, 46, 23-46.  
 木村重和 (1981) バウムテストの信頼性の一考察 犯罪心理学研究, 18, 特別号, 20-21.  
 桐原葆見 (1948) 精神測定 三省堂  
 Koch, C. (1952) The Tree Test. Hans Huber. (林・国吉・一谷訳: バウムテスト 日本文化科学社, 1970)  
 国吉政一, 林 勝造, 一谷 彊, 津田浩一, 齊藤通明 (1980) バウム・テスト整理表, バウム・テスト整理表——手引——日本文化科学社  
 中田義朗 (1980) 児童の樹木面の発達指標の再検討 日本心理学会第44回大会発表論文集, 533  
 大津山千文 (1984) バウム・テストにおける描画の変容について 静岡大学卒業論文

- 仙田善孝 (1980) バウム・テストの信頼性——幼児を対象として——心理測定ジャーナル, 16, 1, 14-20
- 高見良子, 中田義朗 (1978) バウムテストの基礎的研究 (1)——教示を変えた場合の発達指標の量的検討 (予備調査) 西宮市立教育研究所・研究紀要180, 33-41
- 津田浩一 (1976) バウムテストの教示効果について 心理測定ジャーナル, 12, 3, 5-10
- 津田浩一, 奥 紀子, 山口俊郎 (1981) 心理治療過程とバウムテストの関係——情短施設での収容治療例を通して——児童精神医学とその近接領域, 22, 4, 282-297
- 山中康裕 (1973) 双生児による基礎的研究 林 勝造・一谷 彊編著, 「バウム・テストの臨床的研究」1-26, 日本文化科学社
- 山下真理子, 津田浩一, 一谷 彊, 国吉政一, 林 勝造 (1983) バウムテストの実施方法の検討——いわゆる「2枚実施法」について——日本心理学会第47回大会発表論文集, 633

## SUMMARY

The purpose of the present study was to investigate the correspondence (or coincidence) ratio of the Koch's Baumtest (Tree-Drawing Test) in the so-called "twice-application method", and to give the suggestive data of the implications that the "twice-application method" of this test is relatively more effective in the clinical groups of subjects in comparison to the normal groups.

To each subject of the clinical groups with various psychological or psychiatric symptoms, the Baumtest was first applied at the intake session. After the first application of this session, each subject was taken into short time interview or psychological testing on the basis of the hypothetical judgement of case-worker (, psychiatric doctor, or psychologist). And finally each subject was again required to draw another tree different from the first time.

To each subject of the normal groups who was mainly school or kindergarden child, this Baumtest was usually administered at the beginning and the end of class room lesson.

The data thus collected were checked using the check-items of the Baumtest Tabulation Sheet devised by our research members, and were compared between the normal and the clinical groups of subjects above mentioned.

The main results were as follows:

1. The correspondence (or coincidence) ratios of the checked items in the "twice-application method" were, as a whole, in the range of 60% to 80%, although they were relatively higher in the normal groups than in the clinical groups.

2. The correspondence (or coincidence) ratios calculated in each of the checked items were also different between the normal and the clinical groups, and the lower correspondence (or coincidence) ratios were relatively found more in the clinical groups than in the normal groups. This fact seemed to suggest that, with special reference to the drawing patterns of tree in the clinical groups, the necessity or the effectiveness of the "twice-application method" is to be emphasized.

3. According to the data of the ten-times-application method of the Baumtest from the same subjects, it was found that the ratio of the numbers of newly checked items rose with the lapse of the number of times. But, at the same time, it was found that the rising-ratio above mentioned was very dominant (or obviously distinctive) from the first time to the second time. From this fact, it was found that the number of times of the relatively valid application of this Baumtest to various subjects and, at the same time, taking into consideration of elimination of psychological over-charge (or over-load) of the subjects, seemed to be "twice".

4. From the case-study approach, it was also found that the above mentioned suggestion of the "twice-application method" of this test was, so far as the present study showed, relatively more valid and accurate method from the point of view of more reliable psychodiagnosis.

(付記) 本研究をまとめるにあたり、御協力いただきました大阪市立西野田幼稚園、大阪市立吉野小学校、大阪市立野田中学校、三聖病院長宇佐晋一先生、大阪市中央児童相談所心理判定員諸兄姉、ならびに、バウムを描いて下さった児童・生徒・患者さんたちに心から感謝いたします。